



次の各問いに答えなさい。

問1

次の①～⑩にある——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ちりめんは、表面にこまかなチヂレのある、高級な絹織物だ。
- ② アメリカに二年留学するといっても、コンジョウの別れではないよ。
- ③ 将来は、ボウエキ関係の仕事に就き、世界を駆け回りたい。
- ④ 様々なセイヤクを乗り越え、事を成し遂げる。
- ⑤ 世論にツイジュウすることなく、自分の意見を持つ人は魅力的だ。
- ⑥ 電波が宇宙から送られるエイセイ放送は災害時に強いのが利点だ。
- ⑦ 春になったら、このサクラナミキの前で写真を撮ろう。
- ⑧ その件についてはもう少し待ってくれないか。モツカ検討中だ。
- ⑨ 暴飲暴食や夜更かしなどしないで、キリツ正しい毎日を過ごそう。
- ⑩ 国難に立ち向かい、政界をサツシンすべく、政治家を志す。

問2

次のA～Eの文について、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- A 令和二年となった。元号が発表されてからはや九か月、「令和」は人々に浸透してきている。
- B もととなった梅花の歌の序文は、その昔、正月十三日に、大伴旅人の家で宴会が開かれたと伝える。
- C その喜びは、どの時代も変わらない人々の願いだ。心穏やかに過ごしたい令和二年の始まりである。
- D この元号はわが国の古い歌集からとられたものだ。
- E 年の始めに美しい月のもと、梅の色と香りを味わいながら、心許せる仲間と春に酔う。

(1)

A～Eの文を、文意の通る文章になるように、ならべかえなさい。なお、本文はAの文で始まります。

(2)

——線部「わが国の古い歌集」について、次の④・⑤の問いに答えなさい。

- ④ その「歌集」の名を漢字で答えなさい。
- ⑤ その「歌集」がつくられた時代を次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

ア 奈良時代

イ 平安時代

ウ 鎌倉時代

エ 室町時代

オ 江戸時代

後の(1)～(3)の「ア」「オ」にある——線部は、「」に同じ漢字を一字入れると、それぞれよく使われる言い回しがで  
きますが、そのうち一つは文の中での使い方が誤っています。次の(例)にならって、答えなさい。

(例) ア 毎日料理を作り続けることで、次第に「」を上げた。  
イ 三年間、本場のパリでフランス料理の「」を磨いた。  
ウ 料理修行の「」が鳴って、コンテストで優勝できた。  
エ 料理の「」が立つという彼の評判が、世間に広まる。  
オ 「」によりをかけて作った料理で、客をもてなした。

解答例

(例) 漢字 腕 誤り ウ

(1) ア 私には「」に負えない問題の解き方を、先生が教えてくださった。  
イ 収集家ならだれでも、のどから「」が出るほど欲しがる一級品だ。  
ウ 優勝候補でも「上手の「」から水がもれる」というとおり、負けてしまった。  
エ 農家の人たちが「」塩にかけて育てたお米は、一粒もむだにはいけない。  
オ 他人に頼らず、自分で「」をこまねいてチャンスをつかみ取らねばならない。

(2) ア 思いがけない知らせに、「」色を失うほど喜んだ。  
イ テレビに出演したら、すぐに「」が売れるだろう。  
ウ 人前で転んでしまい、「」から火が出る思いをした。  
エ 親戚一同が「」をそろえるのは、何年ぶりだろうか。  
オ 仏の「」も三度で、いつも約束を破る君をもう許さない。

(3) ア 先生を長い時間待たせてしまうことには、さすがに「」がとがめる。  
イ 父の帰りはいつもおそいが、これだけおそい何だか「」がもめる。  
ウ 小学生からの友人で、「」が置けない仲間たちと海外旅行を楽しんだ。  
エ 私の「」にさわる美しい音楽を聴くと、落ち着いた気持ちになる。  
オ 今年の春休みは、「」がすむまで好きな読書をして過ごしたい。

## 二

次の文章（A）・（B）は、伊坂幸太郎の小説、『逆ソクラテス』の冒頭部分と結末部分に近い一節である。これらを読んで後の問いに答えなさい。

（A）「野球中継で、八回の表、三番打者が打った後に続く場面」

打球の飛距離はかなり長い。カメラがボールを追う。投手が苦しい表情で、振り返る。センターの一番深いスタンドに向かい、ボールは落下していく。大きな放物線を描く、その動きに、観客の誰もが見入っていた。

その時、背中を見せ、走っているのは守備要員で入ったばかりの選手だった。体は大きくないものの、粘り強さと選球眼で打率は良く、今シーズンのチームの原動力となっていた。ただし、独断専行が過ぎる監督に反発したが故に、スタメンから外されることが多くなっており、そのことはたびたびスポーツ紙やファンから嘆かれてもいた。私怨で、監督がチームの足を引っ張って、どうするつもりなのか、と。その、中堅手は俊足で飛ばしている。日ごろの監督との対立で溜まっていた鬱憤を晴らすかのような快走だ。

⑦ 捕まってるものか、とボールが速度を上げたようでもある。

中堅手がセンターフェンスに向かい、跳躍する。ぐんと、飛び上がる。そして、宙で体を反り返らせ、着地した。ボールは？ 注視していた観客たちが無言ながら、一斉にそう思う。ボールはどこだ？

誰もが息を呑む。短い時間があり、その後で、中堅手が挙げた左のグローブに白いボールが見えた。観客席から場内の空気をひっくり返す、大きな声が湧き上がった。

中堅手はその場で、右の肘を曲げると、空中に浮かぶ透明の宝を、大事に、そして、全身の力で、握り締めるかのような仕草をした。小さなガッツポーズとも見える。それから、両手で顔をこする。ばしやばしやと洗う仕草で、その後で、指を二つ出した。

（B）「小学六年生の「僕」が通う小学校で、プロ野球の打点王を迎えての野球教室が開かれることになり、前日、

「僕」は安斎に連れられて、素質があると草壁を褒めてほしいと打点王に頼みに行った。そして野球教室当日を迎えた場面」

「草壁、女子じゃないんだから、何だそのフォームは」久留米の声は大きくないのだが、低く、あたりによく聞こえる。近くにいた生徒が、「草壁、女子みたいだって」と言い、土田か誰かが、「オカマの草壁」と嘲した。安斎が舌打ちをするのが聞こえた。久留米が意図的に言ったとは思わぬが、確かに、そういった発言により、他の生徒たちが、「草壁のことを下位に扱っても良し」と決めている節はある。

安斎は縫るような目で、打点王氏を見上げた。「草壁はどうですか？」と、草壁の名前をはっきりと発音し、昨日の依頼を想起させるように、言った。

打点王氏は眉を少し下げ、口元を歪めた。このスウィングを褒めるのは至難のわざ、と思ったのかもしれない。

「よし、じゃあ草壁、もう一回、やってみなさい」① 久留米が言ったが、そこで、安斎が、「先生、黙ってて」と言い放った。

久留米は、自分に反発するような声を投げかけた安斎に、目をやった。② 自分に向けられた槍の切っ先の形を、じつと確認するかのようではあった。むっとしていくかどうか分からない。

「先生がそういうことを言うと、草壁は緊張しちゃうから」安斎の目には力がこもり、声も裏返っていた。

「こんなことで緊張して、どうするんだ。緊張も何も」

「先生」あの時の安斎はよく臆せず、喋り続けられたものだ。つくづく感心する。「草壁が何をやっても駄目みたいな言い方はやめてください」

「安斎、何を言ってるんだ」

「子供たち全員に期待してください、とは思わないですけど、駄目だと決めつけられるのはきついです」

安斎は、ここが勝負の場だと覚悟を決めていたのかもしれない。立ち向かうと肚を決めたのが分かり、僕は気が気ではなかった。

打点王氏のほうはいえ、大らかなのか、鈍感なのか、安斎と久留米との間で起きる火花を気に掛けることもなく、草壁のそばに歩み寄ると、「もう一回振ってみようか」と言った。

はい、と草壁は顎を引くと、すつと構えた。先ほどよりは強張りはなく、脚の開き方も良かった。先入観を、と僕は念じていた。そのバットで、吹き飛ばしてほしい、と。

もちろん草壁が、プロ顔負けの美しいスウィングを披露し、その場にいる誰もが呆気に取られ、草壁がいちやく学校の人気者になる、といった劇的な出来事が起こると期待していたわけではなかった。むしろ、そのようなことは起きなかった。草壁の一振りは、先ほどの腰砕けのものに比べればはるかに良くなっていたが、目を瞠るほどではなかった。

② 安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた。

腕を組んでいた打点王氏は、草壁を見つめ、「もう一回やってみよう」と言う。

こくりとうなずいた草壁がまた、バットを回転させる。⑦ 弱いながらも、風の音がした。

「君は、野球が好きなの？」打点王氏が訊ねると、草壁はまた首だけで答えかけたが、すぐに、「はい」と言葉を足した。

「よく練習するのかな」

「テレビの試合を見て、部屋の中だけど、時々」とぼそぼそと言った。「ちゃんとは、やったことはありません」

「そうか」打点王氏はそこで、少し考える間を空けた。体を捻り、安斎と僕に一瞥をくれ、久留米とも視線を合わせた。その後で、草壁の肘や肩の位置を修正した。

草壁が素振りをする。

ずいぶん良くなったのは、僕にも分かる。同時に、打点王氏が、「いいぞ！」と⑧ 大きな、透明の風船でも破裂させるような、威勢の良い声を出した。まわりの生徒たちからの注目が集まる。

「中学に行ったら、野球部に入ったらいいよ」選手は言い、そして、僕たちが望んでいたあの言葉を口にした。「君には素質があるよ」と。

自分の周囲の景色が急に明るくなった。安斎もそうだったに違いない。⑨ 白く輝き、肚の中から光が放射される。報われた、という思いだったのか、達成した、という思いだったのか、血液が指先にまで辿り着く、充足感があつた。

草壁は目を丸くし、まばたきを何度もやった。「本当ですか」

その時、久留米がどういふ顔をしていたのか、僕は見逃していた。もしかすると、見てはいたのかもしれないが、今となっては覚えていない。

「プロの選手になれますか」草壁の顔面は朱に染まっていたが、それは恥ずかしさよりも、気持ちの高まりのためだったはずだ。久留米の立つ方向から、鼻で笑う声が聞こえたのもその時だ。何か、草壁をたしなめる台詞を発したかもしれない。

「先生、草壁には野球の素質があるかもしれないよ。もちろん、ないかもしれないし。ただ、決めつけるのはやめてください」

「安斎はどうして、そんなにムキになっているんだ」久留米が冷静に、淡々といなす。

「でも、草壁君、野球ちゃんとやってみたらいいかもよ」佐久間がいつの間にか、僕たちの背後に立っていた。「ほら、プロに太鼓判押されたんだから」

草壁は首を力強く縦に振った。

恐る恐る目を向けると、打点王氏は僕の予想に反して、明るい顔をしていた。あれは、乗リかかった舟、の気持ちだったのだろうか。それとも、先生と安斎のやり取りから、嘘をつき通すべきだと判断したのか、そうでなければ、草壁の隠れた能力を実際に見抜いたのか、いやもしかすると、豪放磊落の大打者は、あまり深いことは考えていなかったのかもしれない。彼は、草壁に向かい、「そうだね。努力すれば、きっといい選手になる」と付け足した。

久留米はそこでも落ち着き払っていた。「何だかそんな風に、持ち上げてもらってありがたいです」と打点王氏に頭を下げた。「草壁、おまえ、本気にするんじゃないぞ」とも言った。「あくまでもお世辞だから」

念押ねんおしする口調が可笑おかしかったから、いく人かが笑った。場が和やわんだといえ、和んだが、わざわざそんなことを言わなくとも、と僕は承服じやうふくできぬ思いを抱いだいた。

「先生、でも」草壁が言ったのはそこで、だ。「僕は」

「何だ、草壁」

③「先生、僕は」草壁はゆっくりと、「僕は、そうは、思いません」と言い切った。

安斎あんさいの表情がくしゃつと歪ゆがみ、笑顔えがおとなるのが目に入るが、すぐに見えなくなった。なぜなら、僕も目を閉じるほど顔を歪め、笑っていたからだ。

(注1) 久留米——「僕」たちの担任の先生。

(注2) 土田——「僕」のクラスメート。久留米に気に入れようとする言動が目立つ。

(注3) 佐久間——「僕」のクラスメートの女子。家柄いへがらも成績もよく、久留米から特別扱あつかいされているが、久留米のことをよく思っておらず、これまでも草壁の評価を高めようとする安斎の作戦に協力してきた。

問1

——線部a、b、cは、本文ではどのような気持ちや状態・意味を表す語として使われていますか。最も適当なもの、次のア、イ、ウ、エ、オからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

a 「息を呑む」

- ア 非常に集中して見守る。
- イ 激しい興奮状態に陥おちいる。
- ウ 緊張を抑えようとする。
- エ 次の展開のために準備する。
- オ 重々しい雰囲気ふんいきを振り払はらおうとする。

b 「鼻で笑う」

- ア 予想外過ぎる相手の言動に対して正常な判断ができない。
- イ 何の思慮しりょもない相手の言動に対して嫌悪けんおを感じる。
- ウ 現実離れげんじりしている相手の言動に対して軽蔑けいべつした態度をとる。
- エ たいしたことの無い相手の言動に対して優越感ゆうえつかんを抱く。
- オ あまりにもありきたりな相手の言動に対して面白おもしろみを全く感じられない。

c 「乗りかかった舟」

- ア 本当は嫌いやだけれど、断り切れずにしかたなくやり遂とげる。
- イ いったんかわった以上、途中でやめるわけにはいかない。
- ウ たいしたことでもないことが、やっているうちに大きな意味を持つてくる。
- エ いいことをすれば、必ず自分にもいつか報はぐわれることがある。
- オ これからどうなるかわからないが、自分のやり方次第しだいで何とでもなる。

問2

——線部①「久留米が言った」とありますが、久留米はなぜそのように言ったのですか。その理由として最も適当なものを次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア さきほどの自分の発言によって、生徒たちを良くない方向に導いてしまったことを反省し、何とかこの場を取り繕おうと思ったから。
- イ 自分の生徒である草壁を傷つけるような発言をしてしまったことを後悔し、草壁の心を何とか前向きにしてやりたいと思ったから。
- ウ せっかく来てくれた打点王氏が困っている様子を見て、ここは自分が打って出て、打点王氏に力を貸すのが得策だと思ったから。
- エ このままでは草壁も打点王氏もばつが悪い状態のままなので、自分の力でこの状態から脱するようになりたいたと思ったから。
- オ ここで自分が何も言わなければ、打点王氏が安斎の口車に乗って、草壁を褒めてしまうのではないかと思つたから。

問3

——線部②「安斎を見ると、彼はまた、打点王氏を見上げていた」とありますが、この時の「安斎」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問4

——線部③「安斎の表情がくしゃつと歪み、笑顔となるのが目に入る」とありますが、なぜ「安斎」は「笑顔」となったのですか。最も適当なものを次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

- ア 久留米に反発するようなことを草壁が言ったので、これで久留米の怒りの対象が自分ではなく、草壁になったと思ひ、ほっとしたから。
- イ 久留米に逆らつてまで草壁の才能を引き出そうとしてきたのだが、草壁がやつと自分で自分の才能に気づいてくれたので、自分の努力が報われたと思つたから。
- ウ 久留米を怒らせるような大胆な発言を草壁がしたのだが、その言い方がいつもの草壁らしい、ゆつたりとしたものだったので、ほほえましく感じられたから。
- エ 久留米に反発できるくらいに草壁に自信を付けさせようとしてきたが、褒められたことによって草壁が自信を持ち、久留米に反発したので、満たされた気持ちになったから。
- オ 久留米が言うように、あくまでこの場を取り繕うお世辞なのに、草壁が本当に打点王の言葉を信じ込んでいたことがおかしかったから。

問5

——線部④⑤の説明としてふさわしくないものを次のア～オから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア ④は、まるで打球が自分の意志で飛んでいるかのようにであり、それを追いかける中堅手とそれを見守る観衆との間に、緊張感をもたらす表現である。
- イ ④は、予想外のことを言われ驚いた久留米が、この後もつとんでもないことを言われるのではないかと脅えていることがうかがえる表現である。
- ウ ⑤は、まだまだではあるが、打点王氏の言葉に力を得て、草壁のスウィングがすこしは様になってきたことがわかる表現である。
- エ ⑤は、そこには何の打算も働いておらず、打点王氏が純粋に草壁のスウィングを褒めているということがわかる表現である。
- オ ④は、これまで重くのしかかっていた不安が一挙に解消されて、僕や安斎の気持ちがあつとしたことを表す表現である。

問6

線部「それから、両手で顔をこする。ばしやばしやと洗う仕草で、その後で、指を二つ出した」とありますが、この小説は、この仕草をするに至る経緯を徐々に明らかにし、(B)の文章の後で、この仕草の意味をはつきり示すという構成になっています。(B)の後にある、次の一節を読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

「いつかさ、おまえがプロ野球で活躍したとするだろ」

「たとえば、ね」僕は笑うが、安斎は真面目な顔だった。「その時、たぶん、俺たちは今みたいに毎日会ってるわけじゃないんだから、俺たちに向けて、合図を出してくれよ」

「合図？」

「活躍した後で、たとえば」安斎は自分の顔を洗う仕草をし、その後で、二本の指を前に突き出した。目潰しでもするかのように、だ。

「こういうの、とか」

「その恰好、何か意味あるの？」訊ねたのは僕だ。

『顔を洗って、ちゃんと』

X

『ってそういう意味だよ。大人たちの』

Y

に負

けなかったぞ、って俺たちにサインを送ってくれよ」

ああなるほどね、と草壁は目を細めて、聞いていた。

(1)

X

にあてはまることばを次のア～オから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 一からやり直せ

イ 自分の目で見る

ウ 野球に取り組め

エ 過去を振り返れ

オ 立場をわきまえろ

(2)

Y

にあてはまることばを、(B)の本文から三字でぬき出して答えなさい。

問7

この小説のタイトルは『逆ソクラテス』ですが、これは誰のことを指していると思われますか。(B)の本文の登場人物から選んで答えなさい。なお、「ソクラテス」は、この小説の他の箇所にも、「ソクラテス?」「自分は何も知らない、つてことを知っているだけ、自分はマシだ」つて、そう言つてたらしいんだ」とあるように、「無知の知」を説き、人々を真理探究へと導いた、古代ギリシアの哲学者のことを指します。

### 三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

米の起源地については未だ確定していないものの、中国の南部であると考えられている。大陸から日本に稲作が伝えられたのは縄文時代の後期のことであると言われている。

縄文時代の前は、世界は氷河期が断続的に続いていた。寒冷な気候だったのである。

気温が下がれば地上の水は海に流れることなく凍り、氷となる。そのため、海の水は少なくなり、海面は下がる。そして、海面が下がったことよって日本列島と北はシベリア半島とつながり、南は朝鮮半島とつながっていた。このとき、日本人の祖先となる人々は、獲物を追って、大陸から地続きの日本の土地へとやってきたのである。

ところが、縄文時代になると、気候が暖かくなる。すると、氷は溶けて海面が上昇する。

日本列島も現在、平野になっているところは海の中になってしまった。縄文時代の遺跡はずいぶんと高台にあるが、それは山と海とが近かったからなのである。

縄文時代の人々は、こうして海の幸、山の幸に恵まれた生活をしていた。

① 青森県の三内丸山遺跡に代表されるように、縄文時代の遺跡は東北や北海道に多い。東北や北海道も温暖で豊かだったのだ。

米がどのようなルートで、どのようにして日本に伝わってきたのかについては、朝鮮半島を経由したルート、中国大陸の長江流域から対馬海流に沿って直接伝えられたルート、中国南部から、黒潮に沿って南西諸島を経由して伝えられたルート、の三つの伝播ルートが考えられている。

しかし、米の伝来については、未だにはっきりしていない。② もっとも、考えてみればそれも無理のない話である。

たとえば、あなたの学校でおしゃれなペンケースが流行ったとしよう。それを最初に持ってきたのは誰だろう。あるいはそれを広めたのは誰だろう。転校生が使っていてブームが起きたとか、ファッションリーダーの子が使ったのが最初だとか、来歴がはっきりしている場合もあるかも知れない。しかし、多くの場合、流行の発点はわからない。

もしかすると、複数の子がいじめ始めたのかも知れないし、最初に誰かが使っていたときには見向きもされなかったのに、影響力のある誰かが使い始めたときから、一気に流行ったのかも知れない。あるいはテレビやSNSで情報が共有されて一気に広まったのかも知れない。

日本への米の伝来も同じことである。

一人の歴史上の偉人が米を日本に伝えたわけではない。古い時代から、日本と大陸との海を越えた交流はあったため、さまざまな人が、さまざまな機会に米を持ってきたことだろう。そして、ペンケースがいつの間にか学校中で流行していくように、米もまた、日本各地へと広がっていったことだろう。

しかし、流行が学校中に広がっていったように、③ 縄文時代の終わりに日本に伝わった米が、すべての人々によって大歓迎されたわけではなかったようである。

縄文時代にも、農業がまったくなかったわけではない。狩猟採集を基盤としながらも、小規模な作物栽培を行った。サトイモなどを植えて、放置しておく半栽培が行われていた。また、縄文時代の中期になると焼き畑などの原始的な農業が行われるようになったと言われている。

狩猟採集に頼っていた旧石器時代から縄文時代は貧しい時代であり、稲作農業が定着した弥生時代は豊かな時代であるというイメージがある。しかし、実際にはそうではない。

水を田んぼに引き入れて、農作業を行う稲作には、多大な労力を必要とする。

狩猟採集で労力なく食糧を得ることができるのであれば、わざわざ苦勞をして稲作などする必要はないのだ。そのため、日本に農業が伝わっても、日本に住んでいるすべての人々が、すぐに大喜びで稲作を始めたわけではなかった。

稲作が大陸から九州北部に伝えられたのは、縄文時代後期のことである。その後、稲作は急速に広がり、わずかな半世紀の間に東海地方の西部にまで伝わったとされている。しかし、そこから東側には、なかなか広がっていかなかったのである。

なぜか。

気候が温暖な当時の東日本は、食糧に困らない豊かな地域であった。

縄文時代中期の一〇〇平方キロメートルの人口密度は、西日本ではわずか一〇人未満であったのに対して、東日本では、その数十倍の一〇〇〜三〇〇人であったと推計されている。温暖で豊かな落葉樹林が広がる東日本は、大勢の人口を養うのに十分な食糧があったのである。人口を支える食糧が不足する西日本では稲作は急速に広がったが、十分な食糧がある地域では、労働を伴う農業は受け入れられなかったのだ。

しかし、縄文時代から弥生時代にかけて、稲作はゆっくりと時間を掛けながらも、確実に広がっていった。④ どうして、食糧の豊かな地域にも農業が受け入れられたのだろうか。

一つには気候の変化を挙げることができる。

約四〇〇〇年前の縄文時代の後期になると、次第に気温が下がり始めたことから、東日本の豊かな自然は、大きく変化をするようになった。特に、東日本は、先述したようにもとの豊かな食糧に支えられて人口密度が高かったから、食糧の不足は切実な問題となったことだろう。

しかし、それだけではない。

農業によって人々が得るものは、単に食糧だけではない。

狩猟採集の暮らしでは貧富の格差は起こりにくい。獲物を大量に獲っても、一人が食べることでできる量は決まっている。そのため、食べきれない分は仲間と分配するしかない。

一方、農業によって得られる穀物は、食べきれなくても貯蔵をすることができる。貯蔵できる食糧は「富」となる。こうして富を持つ人が現れ、同時に貧富の格差が生まれるのである。

弥生時代の遺跡からは、たくさんの壺やかめが発掘される。これは穀物を貯蔵するために使われたものだ。また、縄文時代までは祭殿として用いられていた高床式の建築が、弥生時代になると高床式倉庫として利用されるようになる。稲作によって、「蓄える」という行動が起きるのである。

さらに、米を生産するには多大な労力が必要とする。米をたくさん持つ人は、富と権力を持ち、富と権力で人々を集め、さらに多くの水田を拓いていく。富める者はますます富んでいくのである。

また、稲作のような本格的な農業を行うためには、水を引く土木工事の技術や、農耕のための道具などが必要であ

る。そして、農業を行うための技術は、戦うために鋳を作ったり、武器を作る技術にもなるのである。

お腹いっぱいになれば満たされる食糧と異なり、「富」は、蓄積することもできれば、奪い合うこともできる。攻めでは富を得ることもできるし、攻められれば富を奪われることもある。こうして、農業を行う人々は、競い合って技術を発展させ、強い集団社会を形成していったのである。

こうして、農業は「富」を生みだし、強い集団社会を生み出した。そして、技術に優れた水田稲作を行う人々は、時には武力で狩猟採集を営む人々を圧倒していったのである。⑤ もしかすると「豊かさ」が持つ意味合いはこのとき、農業によって大きく変貌してしまったのかもしれない。

縄文時代は争いのない時代であったと言われる。縄文時代の遺跡からは、戦いで傷ついたと思われる人骨は発見されないのだ。しかし、弥生時代になると、戦いで死んだと思われる傷ついた人骨が発見されるようになる。

米は豊かな富をもたらしたが、同時に争いももたらしたのである。

もつとも私たちがイメージしがちなように、大陸からやってきた弥生人たちが、縄文人を武力で滅ぼしていったというわけではないらしい。

大陸からやってくる弥生人たちは、大勢が一気に押し寄せたわけではなく、少数ずつ時間を掛けてやってきた。そのため、もともと住んでいる多数派の縄文人と交流しながら、また縄文人も稲作技術を取り入れながら、稲作は日本に広まっていったのである。

昔、ガラケーと呼ばれる携帯電話を使っていた大人たちが、スマートフォンの時代になって滅んでしまったわけではなく、ガラケーを使っていた大人たちが、スマートフォンを使うようになった。同じように縄文人たちもまた、弥生人の進んだ文化を取り入れていったと考えられているのである。

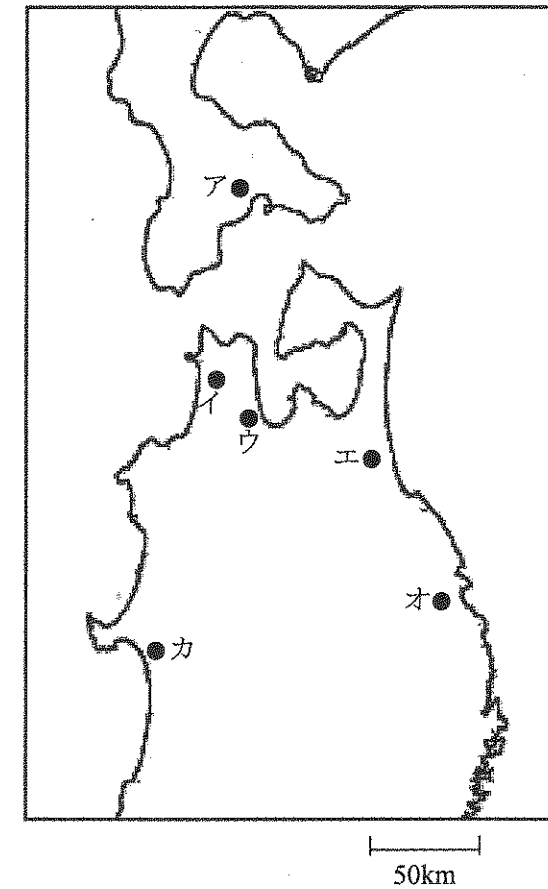
⑥ いずれにしても、稲作という革新的な技術は、日本の歴史に革命を与えた。

(稲垣栄洋『イネという不思議な植物』より)

(注) 三内丸山遺跡——縄文時代前期から中期(約五九〇〇年前から四二〇〇年前)の大規模な集落遺跡。沖館川のそばの高地にある。

問1 —線部①「青森県の三内丸山遺跡」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

- (1) 「三内丸山遺跡」は、青森湾から三キロメートル程度内陸に入った標高約20メートルの地点にあります。現在の地図で示した次のア～カの地点から、「三内丸山遺跡」がある場所として最も適当なものを選んで、記号で答えなさい。



(2)

「三内丸山遺跡」付近は、「日本人の祖先となる人々」が「大陸から地続きの日本の土地にやってきた」ころに比べると、縄文人がそこで生活するころは、どのようなになったと考えられますか。「年間平均気温」、現在の青森湾に向かう方向にある「海岸線までの距離」、「標高」として正しい組み合わせを、次の表の①～⑧から一つ選んで、番号で答えなさい。

|   | 年間平均気温 | 海岸線までの距離 | 標高    |
|---|--------|----------|-------|
| ① | 低くなった  | 近くなった    | 低くなった |
| ② | 低くなった  | 近くなった    | 高くなった |
| ③ | 低くなった  | 遠くなった    | 低くなった |
| ④ | 低くなった  | 遠くなった    | 高くなった |
| ⑤ | 高くなった  | 近くなった    | 低くなった |
| ⑥ | 高くなった  | 近くなった    | 高くなった |
| ⑦ | 高くなった  | 遠くなった    | 低くなった |
| ⑧ | 高くなった  | 遠くなった    | 高くなった |

問 2

——線部②「もつとも、考えてみればそれも無理のない話である」とありますが、なぜ「それも無理のない話」だといえるのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オから選んで、記号で答えなさい。

ア 米の伝播ルートは三つ考えられるが、どの時期にどのルートから伝わったのか、分らないと考えたから。  
イ 何かが伝来するとき、たつた一人が伝えた場合とそうでない場合の伝わり方は異なると考えたから。  
ウ 日本での稲作の広がり方は、学校などの閉ざされた社会での流行のしかたとは違っていると考えたから。  
エ 縄文時代には、テレビやSNSのような、何かの流行を人々に広く伝える技術がなかったと考えたから。  
オ 人々の間で何かが伝播するとき、それがどこからどのように広まるのかは、分からなくて当然だと考えたから。

問 3

——線部③「縄文時代の終わりに日本に伝わった米が、すべての人々によって大歓迎されたわけではなかったようである」とありますが、一部の人々に米が「大歓迎」されなかったのはなぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問 4

——線部④「どうして、食糧の豊かな地域にも農業が受け入れられたのだろうか」とありますが、農業が「食糧の豊かな地域」に受け入れられた原因の一つは何ですか。それを説明した次の文を読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

縄文時代の後期に始まった  によって、狩猟採集に頼っていた東日本に住む人々の生活の基盤となっていた  が原因の一つである。

(1)

にあてはまることばを、本文から五字でぬき出して答えなさい。

(2)

にあてはまることばを、十五字以内で考えて答えなさい。

問 5

——線部⑤「もしかすると『豊かさ』が持つ意味合いはこのとき、農業によって大きく変貌してしまったのかもしれない」とありますが、「豊かさ」は、どのようなことからどのようなことへと変わったのですか。次の  ・  にあてはまることばをそれぞれ考えて入れ、説明を完成させなさい。

ということから  ということへと変わった。

問6

――線部⑥「稲作という革新的な技術は、日本の歴史に革命を与えた」とありますが、日本がどのようなようになったのですか。それを説明した次の文を読んで、A D にあてはまることばを、それぞれ指示された字数で本文からぬき出して答えなさい。

狩猟採集によつて得られる主な食糧とは異なり、稲作によつて得られる米は「A（三字）」ことができる穀物だった。稲作により「A」ことが可能となることで、米をたくさん持っている人とそうでない人との間にB（五字）が生じた。米をたくさん持つ人は、C（四字）を持ち、それを使って人々を集め、さらに多くの水田を拓いて米を生産させることで、ますます大きなCを持つようになった。

それと同時に、人々の間に争いも起こるようになった。稲作を行うために必要な技術は、戦うために砦を作ったり武器を作ったりする技術にも応用された。

こうして、人々は競い合つて稲作がもたらした技術を発展させ、D（六字）を形成するようになった。

令和二年度 岡山白陵中学校入学試験

国語解答用紙

|      |  |
|------|--|
| 受験番号 |  |
| 得点   |  |
|      |  |

一

問 1

|   |          |
|---|----------|
| ⑥ | ①<br>(れ) |
|---|----------|

|   |   |
|---|---|
| ⑦ | ② |
|---|---|

|   |   |
|---|---|
| ⑧ | ③ |
|---|---|

|   |   |
|---|---|
| ⑨ | ④ |
|---|---|

|   |   |
|---|---|
| ⑩ | ⑤ |
|---|---|

問 2

|                           |
|---------------------------|
| (1)<br>A ↓<br>↓<br>↓<br>↓ |
|---------------------------|

|          |
|----------|
| (2)<br>a |
|----------|

|   |
|---|
| b |
|---|

問 3

|           |
|-----------|
| (1)<br>漢字 |
| 誤り        |

|           |
|-----------|
| (2)<br>漢字 |
| 誤り        |

|           |
|-----------|
| (3)<br>漢字 |
| 誤り        |

二

問 1

|   |
|---|
| a |
|---|

|   |
|---|
| b |
|---|

|   |
|---|
| c |
|---|

|     |
|-----|
| 問 2 |
|-----|

問 3

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

小計

三

問 1

|     |
|-----|
| (1) |
|-----|

|     |
|-----|
| (2) |
|-----|

|     |
|-----|
| 問 2 |
|-----|

問 4

|  |
|--|
|  |
|--|

問 5

|  |
|--|
|  |
|--|

問 6

|     |
|-----|
| (1) |
|-----|

|     |
|-----|
| (2) |
|-----|

|     |
|-----|
| 問 7 |
|-----|

小計

問 3

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

問 4

|     |
|-----|
| (1) |
|-----|

|     |
|-----|
| (2) |
|-----|

問 5

|   |
|---|
| X |
|---|

|   |
|---|
| Y |
|---|

問 6

|   |
|---|
| A |
|---|

|   |
|---|
| B |
|---|

|   |
|---|
| C |
|---|

|   |
|---|
| D |
|---|